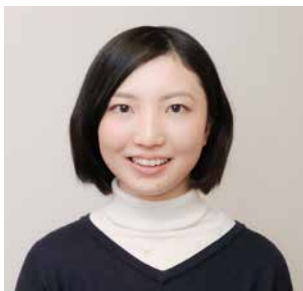


立教大学 社会学部 現代文化学科

社会学科、現代文化学科、メディア社会学科の3学科で、変化し続ける現代社会の多種多様な問題にアプローチしていく社会学部。学科、学部の壁を越え、分野を横断しながら興味を追究し、発見・分析・提言力のある人材を育てます。



■大学生
濱谷みゆき さん



■先生
小池靖 先生



■卒業生
田中みなみ さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

立教大学の社会学部の特徴について教えてください。



■先生

本学における社会学部の誕生は1947年にさかのぼります。文学部社会学科としてスタートし、1958年からは文学部から独立して社会学部となり、今日に至ります。以降社会学部にあった産業関係学科が経済学部経営学科と統合されて経営学部が開設されたり、観光学科が観光学部へと昇格するなど、立教大学の組織やさまざまな学部の母体ともなっている学部ともいえますね。現在社会学部には30人の専任教員が籍を置いていますが、これは日本でも1～2番目に大きな規模です。社会学科と現代文化学科、メディア社会学科の3学科構成で、私は現代文化学科に所属しています。社会学科がどちらかというと社会学の歴史を踏まえた学び方を展開していることから理論的な傾向が強く、現代文化学科はフィールド調査(実地調査)を元に社会の実態を解明するという取り組み方を強みとしています。メディア社会学科はメディアというくらいですから、テレビ、ラジオ、インターネットなどと社会との関わりを勉強するという感じです。

メ

社会学の学問領域は広く、漠然としている印象を持っている人も多いかもしれません。先生は社会学とはどんな学問だと捉えていますか？

■先生

くだけた場所では、過去の社会を研究するのが歴史学だとすると、現代の社会を研究するのが社会学ですよ、という説明をしています。もうちょっと細かくいうと、現代社会のことなら何でも対象にできるという分野が社会学。少子高齢化から、ロックフェスに集う若者までを研究することもありますので、何をやるかわからない、とらえどころがないというのも魅力なんです。学生時代は社会学がどういう学問か知らないまま学び始めたといっている人もいます。一般入試で入った学生たちに聞いても、法学とか経済学に特に魅力を感じなかったので、何でも勉強できそうな社会学にした、という人も結構多いです。とっかかりとしては、そういう関わり方でも良いと思います。

その“何でも研究対象になる社会学”を学ぶ意味についてはどのようにお考えですか。

■先生

就職という意味でいうと、社会学で学んだことを直接活用して就活している学生はそんなに多くないと思います。中には統計を学んだのでリサーチ会社、調査会社とかコンサルティング会社、マーケティングの会社に入るパターンはあると思いますが、具体的な何かに結びつくというよりは、社会のことができるだけ客観的に観察、調査して、自分の主張を語る際に、根拠を持って学問的に発信する姿勢を学べるというのが、私としては一番有用であると思ってほしい側面です。

先生はどのような研究をテーマとしているのですか。

■先生

大きく分けて2つのテーマがあります。一つは「宗教社会学」という科目を通して、スピリチュアルとかカルト現象について学生たちに伝えています。加えて私はもう一つ大きな柱があって、カウンセリングというものが現代社会で人気を得て実践されているのはどうしてなのかということを調べています。カウンセリングが必要とされている社会、それを分析する授業が「セラピー文化論」という科目になります。

私は『セラピー文化の社会学』という本を出版していて、その中でネットワークビジネス、自己啓発セミナー、自助グループというものを扱ったんです。自己啓発のような、宗教とビジネス人生論がミックスされた領域や、依存症からの回復のために当事者だけでグループをつくって当事者同士で語り合う自助グループ。このような対象というのは社会学者からも宗教学者からも等しく関心を持たれているのですが、そういったものをひとくくりにする言葉というか概念を模索する中で出会ったのが、1990年代のアメリカの学問に由来する「セラピー」とか「セラピー文化」という言葉。これらを軸に研究した博士論文を元に書籍として出版するに至りました。宗教と非宗教との間の狭間にあるような現象に関心を持ってきていて、そこから現代社会を見つめるというのが私の研究です。

そのテーマに関心を持ったきっかけはどんなことだったのでしょうか。

■先生

大学2年にカリフォルニア大学デービス校というところに留学したときに、たまたま履修した科目が宗教社会学だったんです。そこでネットワークビジネスとか自己啓発セミナーについても学んだことが一番大きなきっかけです。留学から帰ってきて3年生になった時には社会学者になりたいと何となく思うようになり、そのまま国際基督教大学を卒業し、東京大学の大学院に進みました。社会学というのは何か自分フィールドを見つけてやっていかないといけないので、そのときにアメリ

力で触れることができたネットワークビジネスや自己啓発セミナーのような、宗教と非宗教の境界線上にあるような現象をテーマとして選んだという感じですね。

日本でもそのようなテーマが関心を持たれつつも、どのように触れたらいいかわからないと思われていた時期でしょうか。

■先生

私が大学院の1年生のときにオウム真理教事件が起きました。1970年生まれなので、10代がちょうど1980年代になるのですが、ネットワークビジネスをやっている学生が社会問題化した80年代、90年代には東京を中心に自己啓発セミナーが流行っていました。東京で学生生活をする中では割と「身近にあるカルト」という印象もありましたね。

そんな小池先生のゼミで学んだ田中さんは、どんな学生でしたか？



■卒業生

先生のゼミに入ったのは3年生からです。はじめは本を読んでどう考えるか、何を言えるのかをゼミのみんなで討論するという基本的なことを学びました。3年生の後期からはインタビューを交えた研究をチームで行うようになりました。その時に私が扱ったのは婚活です。少子化や晩婚化が進む中で、婚活業界は何をしているのかという疑問を持ち、調べてみました。婚活業界や婚活の会社へインタビューにも行きました。大規模に展開している会社だけでなく、街の小さい結婚相談所みたいなところにも行き、話を聞きましたね。

■先生

補足すると、私はゼミ生に対してどんなテーマでも扱っていいと言っているんです。3年生には、3～4人くらいの班に分かれて実地調査をしてゼミ論文を書いてもらうようにしています。そして4年生ではひとり1テーマを選んで卒業論文にしていきます。こちらもどんなテーマにでもいいのですが、それは社会学部の先生にほぼ共通の考え方ですね。特に卒論になると、その先生の研究とは直接は関係ないようなテーマを選ぶ学生が少なくありません。

■卒業生

卒論では基督教の教会教育をテーマにしました。私は基督教の信者ではないのですが、祖母から基督教についてよく話を聞いていて、その倫理観に関心を持っていたのです。中高、大学も基督教の学校だったため、その考え方に触れる機会が多かったこともあり、倫理教育を基督教ではどういう風に教えているのか、それがどれくらい現代の道德教育とどういう関係があるのかを調べたいと思い、牧師さんなどにインタビューを行い、研究を進めました。

インタビューをそれほど多く経験したわけではありませんが、友だちではない人と話す機会が多い学生生活でした。婚活企業の方も牧師さんも、研究という機会がないと話せない人たちばかり。

それまでの私は、いろんな人に会いに行くタイプではなく、就職活動でもOB・OG訪問などは始めは積極的にやらなかったタイプなんです。そのため研究を通じて社会人の方と話せる機会がすごく勉強になりました。話し方、振る舞い、研究のために自分が調べたいことについてしゃべってもらう時の質問の方法に苦労したこと、どれも勉強にもなりました。

今はどんなお仕事をしていらっしゃるんですか？

■卒業生

営業です。メーカーの営業職として仕事をしています。パートナー企業として営業・販売を専門としている会社とも連携しているので、そのための販売促進のようなことも担当しています。私自身も製品説明でお客様のもとへうかがってお話をしたり、お客様の声を開発にフィードバックするようなこともあります。銀行をお客様としており、扱っているものは銀行で使われる ATM、行員の方が使う機械などのハード製品です。それと合わせて銀行業務のアウトソーシングができる部分のサービスも請け負っていますね。

就職活動のときは、社会学部だからできることは必ずしも意識しませんでした。人と関わる仕事をしたいと考えて就職を決めました。この会社を選んだ理由は ATM やスーパーとかコンビニで使われるレジなど、エンドユーザーが近い、身近な商品を使っているところが魅力でした。自分もエンドユーザーのひとりであるわけだし、友人などの周りの人の声を開発に伝えることで、より便利な製品を生み出せるという点が楽しいと思っています。

社会学的な学問と営業はあまり関わりがないようにも思いますが、弊社にはマーケティングの部門がないので、統計やユーザーの意見を分析するなどの点で、少しですが学生時代の研究と仕事に接点があるともいえるかもしれません。

濱谷さんは今どんな研究をしているのでしょうか。

■大学生

3 年生なのでグループでの調査は経験しました。小池先生のゼミに入った理由は、高校では仏教、大学ではキリスト教をベースにした環境で学んできたことから、2 つの宗教を身近に感じてきました。そこで宗教と人との関わりに興味を持ったということが大きいですね。

宗教教育の在り方をテーマとして、私の高校の宗教科の先生とキリスト教系の高校の宗教科の先生、そして立教大学のチャプレンの先生、3 人に実際にインタビュー調査を行いました。インタビューを通じて、今まで自分が受けてきた仏教の教育とキリスト教系の教育に関して、宗教は違って共通している考え方があると気づきました。今までは別な宗教だから全然違うと思っていたんですけど、似ているのがとても興味深かったです。宗教が違うため表現やアプローチは違っているけれど、宗教教育を通じてどんな人を育てていきたいかという根底の部分では、同じことを目指しているという点がとても新鮮でした。

このときインタビューを初めて経験しました。こんな答えが来るだろうって予測して質問項目を作ったり、流れを考えたりして挑んだのですが、予想外の返事が来たときに対応する力が全然なくて、本当に難しかったです。その道の第一線で活躍する先生たちと話す中で、知識不足で失礼なことをしてしまったりすることもありました。

※チャプレン：教会や寺院でなく、施設や組織で働く聖職者。

■先生

以前は私も 3 年生の調査に同行していたんですが、それは必ずしも良くないと思うようになり、今は学生だけでインタビューに行っています。ぎこちなさや対象者に対してどう接するかとかなど、それらすべてが学生にとって学びの機会です。質問項目が終わってしまっただけで時間が余るなど、ピンチに陥るわけですよ。そこでも自力で対応してほしいという思いもあります。調査はグループで行うんですが、レポートは各自で書いてもらっているんで、切り口が多様で面白いですよ。

ゼミを経験したことで、関心の方向性は見えてきましたか？

■大学生

これから卒業論文のテーマを決めるんですけど、まだ少し決めかねていて。1つ考えているのが宗教教育と関わりが深いのが道德教育だと思うので、その道德教育と宗教教育がどのように関わっているのかなど、やはり宗教教育を絡めた上で道德教育について考えて行けたらなと思っています。

●大学生活について

この大学、学部を選んだ理由を教えてください。



■卒業生

私は立教女学院出身なので、進学先として身近だったのが立教大学でした。ただ他の大学を受験する友だちも多かったこともあり、悩んだのも事実です。でも最終的に社会学に関心を持ったことが立教大学を選ぶ理由の一つになりました。高校でも卒論のようなものがあり、自分の興味関心を掘り下げる機会があったんです。そのとき、私は子どものころから宗教観というものに関心があったんだと気づい

て、そのことを勉強できるのはどんな学部があるのだろうかと調べた結果、浮かんできたのが社会学でした。そして、高校2年生の時に参加した立教大学のオープンキャンパスが決定的でした。体験授業で小池先生の話聞いたのが大きかったです。そのときのテーマが日本人の宗教についてだったことから、ここだ！ と思って入学を決めました。

学びたいことがあり、それをテーマにしている先生がいたというのが大きいですね。私は「これがやりたい」と将来の仕事や目標が明確になっているほうではなかったなので、興味があるもの、そのときに見つけたものを勉強できるのが社会学だと思いました。

■大学生

私は経済学にも法学にも文学部にも興味がなかったもので、他にどんな学部があるだろうかと調べていたとき、立教大学の社会学部に通っている2つ上に姉の持っている教科書を覗いてみたんです。そこには本当にいろいろなテーマの教科書が並んでいて、社会学部って何でもできるんだなぁと思いました。

学部をまず決めて、大学の名前よりも学べることを重視して大学を選びました。挑戦校から滑り止めまで社会学部系だけを受けたんですよ。その中から縁があったのが立教だったのと、自宅が埼玉なので自宅から通いやすいというのも入学理由のひとつです。

入学してみて、立教大学の印象は変わりましたか？

■卒業生

大学生って、誰にも何も強制されないことが一番の衝撃でした。授業を選ぶのも、授業に出る出ないも自分次第。社会人になった今、何でもしていい期間って大学の4年間だけだったなって思うんです。好きなことをやるって自分の責任になりますが、責任を持った上で好きなことを追求できる貴重な期間でした。

■大学生

私も一番感じたのは自由だになってこと。高校は結構厳しい学校だったので、勉強も自分からやるというよりは先生が小テストあるからやってきてね、というように言われてやるような受け身の生徒が多かったんですが、大学は受け身ではなくて自分でやらないと何もできないことがすごく多い。だから自由なぶん、自分で考えて動かないといけないというのが大学だと思っていました。

カリキュラムや授業で特徴的なものはありますか？

■卒業生

大学に入ったばかりの頃は、授業というと一方的なものだと思っていたんですが、小池先生の授業は映像を多く使っていたのが印象的です。宗教社会学やセラピー論の授業では、模擬カウンセリングの映像など、今まで見たことのない映像を目にすることができました。本で読むよりイメージしやすくって。

あとは、社会学ではないですが、全学共通科目[※]で面白そうなものも多いですね。私は受けたことがないのですが、「都市と野鳥」という科目があって、授業中に外に出て植物や鳥を観察するというもの。かなり多様な授業もありますよね。

※全学共通科目：一般教育にあたる。

■大学生

立教生の中では「都市と野鳥」は有名なんです。受講は抽選なんですけど倍率がすごい。受けたくても受けられない場合もある科目なんです。

濱谷さんが印象に残っている授業は何ですか？

■大学生

一番印象に残っているのが「生命身体社会学」という授業です。こちらの授業は内容が幅広くて、一番始めに「何であなたは今日そのペットボトルのお茶を選んだんですか」という問いから始まります。何でそのお茶を選んだのっていう1つの疑問から、社会と自分の繋がりを見いだしてって、ダイエット飲料と言われる飲み物とかのCMが何でこういう風に作られているのかなどを学び、最終的には精神的な視点に移ってって、人って何だろう、命ってどこから始まるのというような深いところまで掘り下げていくような授業でした。身近なペットボトル飲料というもののから命の根源まで考えるというのがすごく面白くて、印象に残っています。

この授業を受けて考え方が変わったというよりも、新しいものの見方に気づけたことが大きいですね。命がどこから始まるのっていう視点だと、今話題になっている出生前診断とかの面で、その人がどこから始まるのかと言われたときに、だいたい生まれたときって思うんです。でも本当にそこからなのか、受精した瞬間なのか、精子バンクでは精子を持っている人の学歴とかも見るわけだから精子の時点から命が始まっているのか、とか、先生が例をいろいろ挙げていきます。言われてみれば確かに……と思うことも多く、私がいままで当たり前だと思っていたこととは全然違う考えがあるんだなって気づいたことが印象的です。

■卒業生

私もその授業受けました。印象深いですね。

■大学生

テストは記述式なんですけど、答えが広すぎて何を書いていいかわからなくなってしまい、時間の許す限り思うことを書いていました。

自分のこれまでの考え方とは違う視点を知ること、社会学で学ぶ意味になりますよね。では先生から学生に学んでほしいと思うことはどんなことでしょうか。

■先生

社会学部には30人ほどの先生がいますので、私大の社会学の中ではどこにも負けない学習環境を提供していると思います。それとこれは立教だけの特徴というわけでもないですが、ゼミナール教育に力を入れている点もありますね。1年の基礎ゼミに始まり、2～4年もゼミがあって、3、4年は1人の先生のゼミに所属して研究を続けます。そこでは丁寧に指導すべしということでやっているわけです。

3年の私のゼミでいうと、前期は輪読と言ってテキストをみんなで読んで議論する、後期は班に分かれての实地調査、そこからのゼミ論文執筆という形をとっています。文章を書くということを重視した指導をし、大学レベルのレポートを書くということを学んでほしいと思っています。引用や参照の作法を守り、私見を抑えて文章を書かせていて、一つひとつ学生のレポートに添削を入れて指導をするようにしています。レポートの作法を学ぶということは、実は人生観とも無縁ではなく、大学レベルでのレポートの書き方というのは、ある意味で究極の個人主義だと思うんです。自分の意見と他人の意見をはっきり区別して、他人の意見を紹介するときはカッコに入れて紹介し、どの本の何ページのものかということも示しながら論じる。それもある意味、高等教育機関だから学べる個人主義なのだとすることを学んでほしいですね。

また社会調査を通じて人と接することが得意になったりしていく、その成長の過程を見守るのも教員の役割のひとつです。非常に内向的な学生が、調査をきっかけに外向的な面が少しずつ出てくるようなこともあり、そのような変化を見るのは嬉しいことでもあります。

大学の勉強が仕事につながっていると感じることはありますか？

■卒業生

これは社会学に限らずいえることなのかもしれませんが、世界にはいろんな人がいますよということを理解する時間だったと思っています。例えば「差別と偏見の社会学」という授業があったのですが、そこで差別の現状など多様な人間関係の在り方を学んだつもりでした。しかし社会に出ると、自分がこれまで接してきた人よりもさらに多様なバックグラウンドを持つ人と接することになります。こういう考えの人がいるから差別が生まれ、なくならないんだと実感するような場面にも遭遇しました。大学でもいろいろな人がいると思うことは多かったのですが、それは同じ大学という共同体で過ごしている人という、ある程度限られた範囲の中での多様性だったんですね。社会に出て、差別や偏見を感じるシーンに出会ったとき、社会学的な視点が役に立つと感じることがあります。社会学というのは、自分が今いるところから一步引いたところで社会を見るんだって話をしていた先生がいます。人間は油断すると社会や会社の考え方とかに巻き込まれてしまいがちですが、そこで一步引いて、この会社の人はこう考えるんだとか、客観的な見方ができるのは、自分にとってはすごく楽に生きることができる、自分は自分なんだって思う事ができるのは、社会学を学んできたからなのかもしれないですね。

他に特徴的なカリキュラムやシステムはありますか？

■大学生

全学共通科目という授業や、他学部の授業が取れるシステムがあります。社会学部だけでも多様な授業があるんですが、興味があれば理学部の授業だって履修できる。幅広い勉強ができるのは立教のいいところだと思います。社会学部の現代文化学科の友だちが、もっとグローバルに学びたいと単位の許す限り異文化コミュニケーション学部の授業を受けているというようなこともあるんですよ。

■卒業生

今、他学部の授業の話も出ましたが、提携している他大学の授業や図書館も使えます。自分の研究に必要な資料が立教大学になかったため、他大学の図書館に借りに行った記憶もありますね。

先生がおすすめしたいプログラムはありますか？

■先生

2016年に国際社会コースというのができまして、このコースを入学時から選ぶ学生もいれば、既存の学科から2年次にコースを選択することもできるシステムになっています。これは英語を使い

ながら社会学を学ぶというプログラムで、グローバルな視点で日本と海外の社会や文化を理解することを目的としたコースです。グローバル社会への対応については、少しずつ取り組みを増やしているというのが現状といえるでしょう。

●就職活動、仕事について

就職活動はどのように展開してきましたか？

■卒業生

特に方向性を決めず、いろいろな会社の説明会に行ってみて、気になった会社を受けてきました。業界ではなく会社で選んできたと思います。結果としてメーカーや金融関係の企業にエントリーすることが多かったですね。

自分のやりたいことが見つからなかったのも、就職活動を通してその日に気づいたこと思ったことをひたすらノートに書き留めていました。今になって思えば、就職活動と直接関わりはなかったような気がしますが、さまざまな会社を見て、考えるという経験は社会勉強としてとてもよかったと思います。面接のときに言われたこと、自分が周りにどう見られているか、その意見に対して自分はどう思ったのか。そのときの気持ちはすぐに忘れてしまうので、書いておくことで自分の想いを再確認することもできました。

会社を選ぶ際に重視したポイントがありますか？

■卒業生

自分が仕事をしている姿がイメージできること、多くの人に関われること、そしてその企業で働く人と自分が合っているかということ、この3つを軸にして会社を選びましたね。

これから就職活動が始まる濱谷さんは、今どんなことを考えていますか？



■大学生

私もどちらかというとその会社が自分に合うかというのを大事にしたいなと思っています。今はインターンを少しやってみて、自分に合う合わないを判断している段階です。これから説明会に参加して、より広い視点で選んでいけるようになるのではないかと考えています。

大事にしたいところは社風ですね。大学生感覚ながらもアルバイトを通じて仕事の内容とかが辛くても人が良ければ

頑張れるなってことは感じています。やっぱり職場の環境が大事だと思うので、多くの人と会って人を見て合うところを見つけたいです。

■先生

立教ではキャリアセンターがイベントをやったりもしていますよね。

■大学生

最近受けたキャリアセンターの講座は面接体験で、予約しているのはグループディスカッションの体験。面接の実践の講座は予約が取れなくてまだ受けていません。体験は本当に練習で学生同士が面接し合うんですが、実践のほうでは実際にキャリアセンターの方が面接官になって面接して、その様子をフィードバックしていただけるというのがあります。他には早い段階だとインターンシップの活用の仕方の講座とかも受けましたし、自己分析のやり方とか志望動機の書き方とか、様々な講座を受けたほうだと思います。

■卒業生

私も面接の練習は受けましたね。就職活動の緊張感を感じながら、本番の面接と同じくらいの話ができただかなと思います。あと参加していないですが、服装とか就活メイクとかもあったと思います。

■先生

学内説明会や多様な講座など、様々な角度から就職活動をケア、サポートしていると言えるでしょう。

社会学部の卒業生の就職先として人気の業界などありますか？

■先生

金融やIT企業が多い印象があります。製薬会社の営業、MR職も増えています。また、広告系を目指す学生もいます。

社会学を学んだことで目指せる業種としては、その知識を活かしてリサーチを行ったりするような仕事に就くという道もありますね。

就職して2年経つ今、お仕事のどんなところにやりがいを感じていますか。

■卒業生

やりがいは二つあります。一つはお客様をはじめとする人の役に立てているという実感です。私たちの製品を買ってくださっているお客様だけでなく、販売を担当してくれているパートナー会社、そして社内開発を担当している部署のみなさん。そういった方々に「居てくれてよかった」と言ってもらえるような働き方ができていることに喜びを感じています。そしてもう一つは、市場のニーズを吸い上げて製品を作っていけるということ。これはメーカー勤務ならではのやりがいですね。例えば銀行のATMに対して、今はみなさんお金を引き出す機械という認識だと思うのですが、それにチケットを取れるような機能を追加できるんじゃないか、振り込み詐欺予防のためのシステムを組み込むことができるんじゃないか、そういったことを開発と共に実現できる立場にあるので、メーカーとして社会を少しでもよくすることに関われているという実感があります。

●5年後に向けて

先生の研究は5年後にはどのように発展しているでしょうか。

■先生

それを宗教とよぶかどうかは別として、私の研究対象は現代人の生きがいとかアイデンティティです。それらを具体的なフィールドに基づいて研究していることは変わりがないと思います。加えてここ数年、インターネットが人々の精神にどんな影響を与えているんだろうかということにも関心を持っています。実際にSNSの使用頻度が高い人は教会に行く傾向が低いという調査結果もアメリカでは出ているということから、人と人との結びつきの形をインターネットが変えていることは間違いない。それを具体的にどうやって調べるかというのは社会学の先生たちが日々考えて苦闘しているところだと思います。私はこれまで日本とアメリカを意識して研究してきましたが、アジアにも少しフィールドを移してみたいと考えるようになってきたので、フィリピンやシンガポールなどアジアの都市の調査も始めていきたいですね。これらの国々は経済発展している国でもありますし、観光都市でもあります。立教大学には観光学部もありますが、観光をはじめとする余暇活動で、人々が喜びを見いだしていくというのは現代人の生き方として無視できない。このような視点から、アジアの都市にも少し関心を持っているところです。

■大学生

自分の2年後すらわからない状態なので何とも言い難いのですが、5年後は順当に行けば社会人3年目、とりえず就職をしていると仮定して、仕事を頑張っていたらいいなあと思っています。どん

な業界で働いているにしても、やっぱり自分で考えて自分の頭を使ってちゃんと自分の力で社会と繋がっていられたら、それが頑張っているってことなんじゃないかなって思っています。

仕事以外のことなら、私は旅行に行ったりはするんですが国内止まりなんです。5年後には外国行くとかそういう挑戦ができる自分でいたいと思っています。

■卒業生

今は営業らしい営業、という感じで仕事ができているのですが、働く環境として社内にはまだまだ古い文化が残っているので、会社の中身を変えていきたいという気持ちがわいてきています。マーケティングの部署や社員の働き方を考えるような部署もないので、今やっている営業の仕事が一人前になっていけば、5年後には自分のやりたいことを主張して、これから必要とされるような部署の立ち上げをしていきたいです。会社のシステム、製品の作り方など、よりよい環境作りをしたいと思っています。

●高校生へのアドバイス

社会学に関心のある高校生に対して、アドバイスをお願いします。

■先生

社会学に科目として近いのは中高では公民になると思うので、まず公民が好きな人なら社会学に向いているのではないのでしょうか。受験勉強に向けてという視点では、一つでも得意科目を持って勉強の仕方がわかってくると、他の科目でも応用できるはずなので、まずは得意な科目を見つけることが大事です。最終的に社会学を選ぶかどうかということは別として、世の中のことに興味を持って、気になった新書を読んでみるとか、優れたドキュメンタリーのテレビ番組を見るときは自分の視野を広げていってほしいです。その結果として社会学部を選んでくれたら嬉しいですね。

学問の内容から考えると、ジャーナリスト志望とか作家になりたいとかいう人には向く分野だと思います。そういう学生が多いわけでは必ずしもないですが、私は小中高と学校で壁新聞を作り続けてきて、その結果ジャーナリストを目指そうと思ったこともあります。最終的には大学時代に留学したことで予先が変わってしまいましたが、世の中のことを知ってそれを自己表現するという願望にはマッチした学問だと思いますね。

受験勉強に対するアドバイスはありますか？



■大学生

今振り返って思うのは、受験科目以外にも目を向けてほしいということ。私は受験では使わないからと数学の勉強をおろそかにしてしまったことを後悔しています。数学や化学に限らず、家庭科や音楽などもそうですが、強制的に幅広い科目を勉強する機会って高校までだと思うんです。さきほど大学は学びたいことを自分で選べると言い

ましたが、選べるということは興味のないこととは関わらなくなってしまうということでもあります。そうなる前の高校時代に、興味がなさそうなことでも全力で取り組んでみることで、見えてくるものがあったのではないかなと思うのです。受験勉強だけでなく、できることは何でもしっかりがんばってみてください。

■卒業生

今、濱谷さんが言っていたことに私もすごく共感します。高校時代に「これを覚えることに何の意

味があるんだろう」と思っていたことも、社会に出てからさまざまな人と接するときの話題になる。それは音楽も家庭科も、一般教養の一つとして必要なことだと今になって実感しています。つまらないと思うこともあるでしょう。でもやっておいて損はないですよ。

これは自分自身の後悔でもあるのですが、高校生の頃は自宅と学校の往復だったのですが、それ以外のところにも勇気を出して行ってみればよかったなって思います。例えばボランティアなどに参加して、これまで接したことのない人と会って世界が広がる、そんな経験をしたかったですね。友人には病院のボランティアに行ったことをきっかけに、医師を目指す決意をした人もいます。それくらい人の将来を変える出会いがあったかもしれないと思うんです。

私は推薦で入学したので、受験勉強というよりは日々の勉強をしっかりと積み重ねて、定期テストにも真面目に取り組んでいくことを重視していました。

■大学生

私は一般入試で入学したのですが、厳しい高校だったこともあって毎週英語や古典や数学の小テストがあって、しっかり点数をクリアしないといけない環境でした。このときに積み重ねてきた勉強が、受験のときにも役に立ちました。

最後に高校生に伝えたい立教大学の社会学部の魅力を教えてください。

■大学生

先ほどから何度も出てきていますが、やっぱり多様な興味を追究できるのが一番の魅力です。私がテーマとしているような宗教のこと、どうしてこんな消費行動が流行しているのかという消費社会学を学んでいる友だち、都市社会学として都市が今のように形成されている理由を探っている人、他学科の科目ばかりを受講している人、本当に十人十色。学びたいことが定まっていなくても、そのとき興味を持ったことを勉強したいなら、社会学部をお勧めしたいです。

■卒業生

個人的にいいなと思っていることは、何百人もが一緒に受けるような大きい授業でも、授業が終わって先生のところへ行ったら気になることを質問すれば、丁寧に対応してくれることです。高校生の頃は先生といえば一方的に授業を行う人という印象を持っていると思いますが、社会学部の先生はどんなことを質問しても聞いてくれますし、一緒に考えてくれる。先生が私たち学生の近くにいてくれる、それが社会学部の魅力だったなと思います。

■先生

社会学を学ぶということは、世の中のことを知りたい人に最適であろうと思っています。そして本学は日本の社会学部の中でも最大の環境なので、さまざまなことが学べる環境であることを保証いたします。

学部選びというのは自分の興味関心を最優先にして選んでほしいとも思うんですね。立教には、社会福祉に興味があるならコミュニティ福祉学部がありますし、観光に関心があったりホテルマンになりたいのなら観光学部もある。企業の戦略に興味があるなら経営学部という道もあるし、社会というよりは人の心理に興味があるなら現代心理学部というのもあります。立教大学にはいろいろな学部学科があり、自分の関心の中心がどこにあるのかを考えて選べるのがいいですね。

キャンパス内に他の学部もありますから、社会学を学びつつ他の分野にも関わっていけるのもこの大学のいいところだと思います。

●大学構内のお気に入りのスポット

■大学生

立教のおすすめスポットとして言うと、姉とも話していたんですが5号館の屋上が有名です。東京

タワーが見えて。

■卒業生

雰囲気あるよね。

■大学生

よくレジャーシート引いて留学生とかがお弁当食べています。晴れている日は本当に気持ちが良いんですよ。

■卒業生

立教大学の校舎もとても好きなんですけど、イベントでいうとキリスト教大学らしくクリスマスのイルミネーションがすごく綺麗で大好きです。冬の結構長い期間、夜になると灯っているので、卒業後もわざわざ見に来たいと思うくらいです。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

小池靖先生

立教大学社会学部現代文化学科准教授

埼玉県私立栄東高等学校出身。国際基督教大学教養学部卒業、東京大学大学院人文社会系研究科社会学専攻博士課程修了。大学2年次にカリフォルニア大学デービス校に留学し、宗教社会学と出会ったことが社会学者を志すきっかけとなる。2009年より立教大学准教授に。担当科目は『宗教社会学』『セラピー文化論』など。

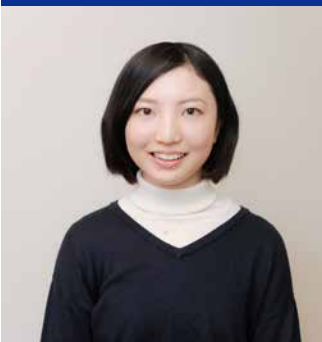


■卒業生

田中みなみさん

富士通フロンテック株式会社勤務

東京都私立立教女学院高等学校出身。立教大学社会学部現代文化学科卒業。2015年4月、富士通フロンテック株式会社入社。現在は営業本部金融流通営業統括部にて、銀行をはじめとする金融機関などで使用する各種機械やサービスを提案する業務を担当。メーカーとしてユーザーのニーズを聞き取りながら、社会に求められる製品やサービスを提供していくことを目指し、開発部門と協力しながら、世の中を便利にできる製品を模索中。



■大学生

濱谷みゆきさん

立教大学社会学部現代文化学科3年生(2016年度取材当時)

埼玉県私立淑徳与野高等学校出身。現在は小池先生のゼミに所属し、宗教教育について研究。宗教家へのインタビューも行いながら、視野や考え方を広げている。卒業論文でも宗教教育と道德教育との関係を追及する予定だという。将来の目標はまだ明確ではないが、インターンなどに参加しながら、自分の働きやすい環境を選んでいきたいそう。